彙報

定住自立圏を主なフィールドとしたIPW/IPEのためのグループワーク教育
― 枝幸町役場・北海道枝幸高等学校・美深育成園・北海道庁・北海道区水産研究所 ―

糸田尚史[1)]*、野中紀鷹[2)]、村上紗規[2)]、秋田華月[3)]
惣藏玲奈[3)]、船木はるか[3)]、村上奈津季[3)]、吉田冴鈴[3)]

[1)]名寄市立大学短期大学部児童学科、[2)]名寄市立大学保健福祉学部栄養学科
[3)]名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：フィールドグループワーク（FGW）、専門職連携（IPW）、連携教育（IPE）

１．はじめに

名寄市立大学保健福祉学部では、これまで栄養学科・看護学科・社会福祉学科の３学科からなる特色ある連携教育科目としての「保健医療福祉連携論」及び「フィールドグループワーク」を展開してきた。本稿では、保健福祉学部の学生7名と2016（平成28）年度より保健福祉学部社会保育学科に移行する短期大学部児童学科の教員1名とが、現在居住している北・北海道中央圏域定住自立圏のなかでも、とくに本学から90㎞ほどの距離にあり、教員が運転する大学の公用車（10人乗りワゴン）で約1時間半の「枝幸町」を主たるフィールドとし、北海道全域の観光及び保健福祉行政や日本国の食糧行政にも関心を広げて、2015（平成27）年4月から2016年1月まで取り組んだフィールドグループワーク（FGW）教育（学生たちが選んだ発表テーマは「楽しいフィールド・グループ・ワークのつくりかた」）に関して報告する。

２．連携教育科目「フィールドグループワーク」

名寄市立大学保健福祉学部のシラバス（講義概要）によれば、連携教育科目である「フィールドグループワーク」は、配当年次が３年生、単位数が２単位、開講形態が演習、開講期間が通年という選択科目である。栄養・看護・社会福祉の各分野の知識を活用して幅広い年齢層の地域住民を対象に、フィールドあるいは学内で事業または行事を企画・実施し、保健医療福祉が連携した仕組み作りや機能的な連携について３学科混成グループで演習を通して学ぶこととなる。演習では、演習テーマ別に活動し、グループワークにおける自他の役割を自覚し、お互いを尊重しながら、対象者の課題に応えるための学習を深めることを目標とする。授業は、演習を通して保健医療福祉連携の意義と効果に対する理解を深めるために、３段階に分けて実施される。第１段階では、保健医療福祉に関わる地域課題の把握を試み、既存データの入手や一部地域住民を対象に聞き取りを行い、３学科混成グループで検討する。第２段階では、役割を分担して高齢者や障害者等の地域住民を対象とする行事や活動を企画・実施する。第３段階はまとめであり、グループワークでの体験を各グループで検討し、全体で発表・討議する。指導は担当教員による他、テーマによって特定領域教員の助言が必要な場合は、当該教員が適宜、指導を支援することとなる。

2015（平成27）年4月20日の第一回目の全体授業では、フィールドグループワークのグループ別テーマ紹介を教員が実施した。配布資料には「【教員名】糸田尚史（児童学科）。【テーマ】保健福祉課保健予防グループや高等学校とのIPW（専門職連携）/ IPE（連携教育）。【対象者】児童（0歳～概ね18歳）。【主なフィールド】枝幸町（名寄市と同じ北・北海道中央圏域定住自立圏を構成している町です）。【教員から一言】昨年度は関朋昭先生のフィールドグループワークの学生さんたちが北海道枝幸高等学校で活動されたそうです。

*責任著者
住所　〒096-8641　北海道名寄市西4条北8丁目1番地
E-mail：itochan@nayoro.ac.jp

児童学科2年糸田ゼミも保健福祉課保健予防グループの保健師さんたちから、IPW（専門職連携）について学んだり、南宗谷子ども通園センターや枝幸地域子育て支援センターなどを見学させていただいたりするIPE（連携教育）を経験しました。名寄から約90キロ離れた（車で約1時間半の）枝幸町をフィールドにして今年度の私たちには何ができるのかを共に考えるところから始め、対象地域に対し、ソーシャル・アクションを起こしていきましょう。【特記事項】枝幸町との往復には大学の10人乗りのワゴン車を利用します。車酔いしないかたで、上限は8名までとなります。毎週集まるのは難しい状況にありますので、年度当初に26回分のおおよその活動日を決めておきましょう。活動報告は共同研究として活字にし、雑誌への投稿を目指します」と記した。そして、パワーポイントを用いたプレゼンテーションにより、この選択科目を履修したいと考えている保健福祉学部3年生の中から「糸田グループ」への所属学生を勧誘した。

その結果、「糸田グループ」には7名（栄養学科2名、看護学科5名）の学生の応募があり、4月27日と5月18日に教員の研究室にて、「定住自立圏構想」及び「IPW / IPE」について学習をした。IPW / IPEに関しては、埼玉県立大学編集（2009）『ＩＰＷ（Interprofessional Work）を学ぶ：利用者中心の保健医療福祉連携』（中央法規）をテキストとして用いた。所属学生には実務家出身教員（糸田）のこれまでの職業経歴と関係諸機関との人脈について話し、それらをグループ活動のなかでツールやリソースとしてどう活用していくか話し合った。また、学習や活動の経過は交代で一冊のフィールドノーツに記載していくことにした。

３．グループ活動の状況

こうして、「糸田グループ」では、2015（平成27）年度のフィールドグループワークにおいて、［表1］のような活動を計画し、順次これらを企画し、実施していくIPE（Interprofessional Education）を行った。

［表1］ 2015（平成27）年度のFGW（糸田グループ）活動

月　日	活　動　内　容	段階
4月20日	フィールグループワーク（FGW）のグループ別テーマ紹介と配属希望調査（新館121教室）	1
4月27日	糸田グループ（配属希望により学生は栄養学科2名と看護学科5名の計7名）の初顔合わせ（糸田研究室）	1
5月18日	専門職連携と連携教育に関する学習とフィールドグループワークの計画を立案（糸田研究室）	1
6月1日	**枝幸町FGW（北海道枝幸高等学校進路指導部、保健福祉課保健予防グループ、教育委員会）**	1
6月8日	**美深町FGW（美深育成園、美深子ども家庭支援センター）**	1
6月21日	比布町FGW（イチゴ狩りにいくも苺不足で閉園）→**剣淵町FGW（「絵本の館」見学と地元食材の昼食）**	1
6月22日	連携食事会（教員宅）	1
7月6日	**枝幸町FGW（地域子育て支援センター、保育所、保健センター）**	1
7月13日	**枝幸町FGW（教育委員会：オホーツクミュージアムえさし）**	1
7月23日	**枝幸町FGW（南宗谷子ども通園センター、保健センター「枝幸・浜頓別・中頓別 保健師・栄養士学習会」）**	1
8月11日	札幌市FGW 1日目（北海道観光局）→すすきのFGW（道庁職員との懇親会）	1
8月12日	札幌市FGW 2日目 （北海道子ども未来推進局、赤レンガ庁舎、国立研究開発法人水産総合研究センター北海道区水産研究所）	1
11月25日	北海道枝幸高等学校での高大連携講座の企画を実施するにあたっての準備（教員宅）	2
11月30日	**枝幸町FGW（北海道枝幸高等学校進路指導部との高大連携講座の企画を実施）**	2
1月18日	フィールドグループワーク報告会のための準備（本館324教室）	3
1月25日	フィールドグループワーク報告会においてグループの活動と成果を発表（新館121教室）	3

※太字が北・北海道中央圏域定住自立圏での活動

4．グループ活動の成果

実施されたグループ活動の成果については7名の受講学生（本稿の共同執筆者）による以下のレポートによく示されている。いずれの文章からもよりよい専門職連携（IPW）が行えるような専門職者になっていくためになされた連携教育（IPE）の効果が窺われる。

(1)実際に現場に足を運び、見学や体験をし、机上で学んだことを再確認しながら、実際の活動を学ぶ

定住自立圏構想とは、市町村の主体的取組として、「中心市」の都市機能と「近隣市町村」の農林水産業、自然環境、歴史、文化など、それぞれの魅力を活用して、NPOや企業といった民間の担い手を含め、相互に役割分担し、連携・協力することにより、地域住民のいのちと暮らしを守るため圏域全体で必要な生活機能を確保し、地方圏への人口定住を促進する政策である。また、人口5万人以上の中心地と協定に基づく相互連携を行う近隣市町村を合わせて定住自立圏という。名寄市及び士別市を中心とする定住自立圏内の周辺都市は枝幸町を含む11町村である。本フィールドグループワーク（FGW）では同じ定住自立圏の名寄市、美深町、枝幸町の各施設などを訪問・調査し、名寄市と周辺町村との連携を学習した。今回は中でも多くの活動を行った枝幸町の活動について報告する。

枝幸町では、枝幸町役場や枝幸町保健センター、オホーツクミュージアムえさし、枝幸保育所、枝幸地域子育て支援センター、南宗谷子ども通園センター、北海道枝幸高等学校等に訪問し、学習を行った。枝幸町保健センターでは保健師と栄養士によるIPW（専門職連携）の学習会などを行った。学習会では名寄市立大学短期大学部児童学科の糸田尚史教授と名寄市立大学保健福祉学部看護学科の播本雅津子教授が講師となり、南宗谷管内の保健師及び栄養士とともに参加型のケーススタディを行った。この学習会では、定住自立圏での人的資源を活用し、地域の専門家へのIPE（専門職連携教育）を行う良い実践例を見学することができた。机上の勉強では分からなかったことを生で見学することができたため、非常に勉強になった。

枝幸高校では、学科ごとに分かれて大学紹介を行った。枝幸高校の生徒は大学生と関わる機会が少ないため、大学へのイメージが持ちにくいというのが現状である。また、名寄市立大学は北・北海道中央圏域定住自立圏内で唯一の大学である。枝幸高校に出向いて大学紹介を行うことによって、生徒は普段話すことのない学生から大学について情報を得ることができ、学生は日々勉強した専門的な勉強を知らない人に分かりやすく教える良い学習の機会となった。

FGWでは上記のような活動を含め、様々な職業の方と関わり、地域での連携について学ぶことができた。この授業を受けるまではIPE（専門職連携教育）やIPW（専門職連携）について学習する機会が少なく、その実際がよく分からなかった。しかし、FGWでは実際に現場に足を運び、見学や体験をすることができたため、非常に理解しやすかった。机上で学んだことを再確認し、実際の活動を学ぶことができる良い学習活動ができたと感じた。（栄養学科・野中紀鷹）

(2)自らの目で見て、心で感じて、学び、いつもとは違う切り口で物事を考える

この一年、フィールドグループワークの活動を通して様々な貴重な体験することができた。フィールドである枝幸町では、保健師の方、教育委員会の方、博物館の職員の方、通園センターの方、枝幸高校の方のお話を聞く機会があった。夏休みには、一泊二日で北海道庁の見学、サケ・マス水産総合研究センター（国立研究開発法人水産総合研究センター北海道区水産研究所）の見学に行った。

道北地域（枝幸町・浜頓別町・中頓別町）の保健師の方々の事例検討会にも参加させていただいた。それぞれの専門職の方々の活発な話し合いで交わされる鋭い意見に圧倒された。またロールプレイングを通して事例を検討することで、別の視点から考えると全く違う問題点が見えてくるということに気付くことができた。事例検討の方法にもいろいろあるということが分かった。博物館の方はクイズなどを交えながら講演してくださり、道北地域の歴史や文化についてとても楽しく学ぶことができた。通園センターでは、マジック・ミラー越しに発達訓練の様子を見学させていただいた。子供ひとりひとりに合わせた特殊な訓練を間近で見

るという、貴重な経験となった。また、支援を受けるまでの流れについても教えていただいた。

枝幸高校では、栄養学科として特別授業をする機会をいただいた。高校生を相手に授業をするのは初めてで不安だったが、とても意欲的に参加してくれたので充実した時間になった。直接関わることで、高校生のみなさんが疑問に思っていることを知ることができ、勉強になった。

他にも、美深の児童養護施設に行ったことがとても印象に残っている。児童養護施設に行くまでは、「児童養護施設」という名前を聞いたことがある程度だった。実際に施設内を見学させていただき、職員さんのお話を聞いて初めて児童養護施設とはどのような場所かということを知った。予想以上に多くの子供たちがそこでは暮らしていた。子供たちはとても元気がよく、笑顔であいさつをしてくれたのがうれしかった。その様子はどこでもよく見かけるような光景で、施設で暮らしている子供は特殊な子供だと今まで勝手に思っていたのが恥ずかしくなった。

フィールドグループワークでは、大学の中で講義を受けているだけでは学ぶことのできない現状について自らの目で見て、心で感じて、学ぶことができた。また、どんな職種間であっても工夫して連携が取られていることがわかった。そして、普段関わることのない他学科の学生との交流によって、いつもとは違う切り口で物事を考えるきっかけになった。（栄養学科・村上紗規）

(3)学生のうちから医療だけではない対人援助の世界を実際に見て学び、幅広く人と接する

今回、1年間フィールドグループワークの授業を通して、先生だけが授業の内容を決めるのではなく、学生が自主的に学ぶことができる機会を作っていただいた。学びの場として、大学が所在する名寄市だけでなく美深町、枝幸町、札幌市と幅広い地域を舞台として学んだことについて、述べていきたい。

枝幸町では子育て支援センターや保育所の見学、枝幸町保健師の方に協力していただき、保健師の仕事内容や枝幸町での支援について教えていただいた。また、高校への訪問では高校生と触れ合う機会も作っていただいた。美深町では美深育成園へ訪問した。さらに、夏休み期間中には2日間にわたって北海道庁を見学し、北海道の観光や北海道の子どもたちの未来にかかわる施策の推進について話していただいた。

とくに美深育成園は、栄養学科・看護学科ではあまり関わる機会には恵まれないため、印象に残り、学びとなったことから、美深育成園に絞って述べていく。美深育成園は美深町にある児童養護施設であり、施設を見学させていただき、施設や仕事内容についてお話を聞いた。私自身、児童養護施設について浅い知識しか持っていなかったが、児童相談所で心理判定員もされた糸田先生のこれまでの児童養護施設との関わりや児童養護施設に来ている子どもたちの入所までの経緯などを具体的に知ることができた。美深育成園に附置されている美深子ども家庭支援センターは児童福祉法でいう児童家庭支援センターであり、相談援助活動のほか里親支援なども行っている。里親家庭は子どもたちに普通の家庭生活をさせてあげたいと思っている方々ばかりではあるが、里親家庭に里子の受け入れ態勢が十分に整っているのかも考慮し、見極めていく必要があると知った。里親制度の現在の状況、それによる子どもへの影響、実際の経験や事例なども聞くことができたのは貴重な体験だったと感じた。

児童養護施設や児童家庭支援センターに関しては、訪れた学生が栄養学科と看護学科であり、関わる機会は多いとはいえない。しかし、栄養学科・看護学科ともに対人援助職である以上、幅広い人と接することは必要であると考えられる。今後、栄養士や看護師として就職して働くと、関わる職種としては医療関係者が圧倒的に多いことが想定される。学生のうちから医療の世界だけではない対人援助の世界を実際に見て学ばせていただく機会を作っていただき、ありがたかった。職業としてさまざまな背景をかかえた方々と接する際に生かしていきたい。（看護学科・秋田華月）

(4)どんな規模であっても、関わる全ての人が共有できる1つの目標があり、関わっていく

フィールドグループワークの授業を通して、連携とは1つの空間の中で行われているものだけではなく様々な規模で展開されていくものであるということを学んだ。

まず国単位、道単位で行われている事業として、北海道庁子ども未来推進局を訪れ、子どもたちの未来を考えていくために行われている取り組みについて学んだ。子どもたちは自分たちの今を良くするために自ら社会参加をすることは難しいからこそ、保育園の整備や子どもの権利を守るための制度を整備し、子どもたちが子どもたちらしくいられる社会を大人の力で作っていくことが必要であった。そのために子ども未来推進局の方は各市町村の方の声をくみ取り、その声を国に届けることで法律や制度改正につなげていた。このような場面では、国と道が、道と市町村が連携をしていくことで法や制度に現場の声を反映しているんだということを学んだ。また出生率に着目し、これから子を産み育てていく方にとってどのような制度が充実していけば仕事と育児を両立していけるかなどもここで検討されていた。

市町村単位では枝幸町と美深町での活動について触れていく。枝幸町では保育園や子育て支援センターを見学し、子どもたちが子どもたちらしく過ごせる空間作りの工夫や、実際に行われていた子育て支援事業を見学した。子どもが走り回れる空間、明るさ、暖かさなど、すべて子ども目線にたち、大人の力で考えていた。その実現に向けては町民の力はもちろん、保育士など現場に立つかたの声も反映していることや、連携としてなされていることがわかった。また子育て支援事業では保健師や栄養士が関わり、子どもと母親の生活を考えていることを学んだ。美深町では美深育成園を訪れ、社会福祉士と心理士が子どもたちの心に寄り添ったり、親子の生活に戻っていけるよう支援していく様子を学んだ。

これらのことから、環境が違っても子どもたちの生活をより良いものにしていくという場面において様々な機関が関わり、連携しているということを学んだ。連携を行う上では情報の共有が必要であること、報告・連絡・相談を怠らないことなどを今まで連携を学ぶ様々な場面で聞いてきた。実際にこのフィールドグループワークの授業を通して様々な機関を見学していくうちに、なぜこれらのことが必要であるのかということを自分なりに考えることができた。連携とは、役割を分担しながらたくさんの組織や人が集まり、その組織や人が自分の役割を果たしながら一つの目標を達成していくことであると感じた。どんな規模であっても関わる全ての人が共有できる1つの目標があり、その目標を達成すべく複数の環境が関わっていくことが大切であると考えるきっかけになった。（看護学科・惣藏玲奈）

(5)「連携」は地域をはじめ様々なところで、たくさんの職種の人々により行われている

名寄市立大学の多職種連携教育の一つのフィールドグループワーク（FGW）では、看護学科5名・栄養学科2名が短期大学部児童学科の糸田先生とともに活動してきた。主に北海道枝幸高等学校・枝幸町役場・美深育成園・北海道庁・北海道区水産研究所をフィールドとして活動した。

私は看護学科で学んできてここに来たため、多職種連携については病院内での連携しか考えられていなかった。しかし、FGWを通して地域にはさまざまな多職種連携があることを学んだ。枝幸地域子育て支援センターでは、保健師・栄養士・保育士が連携し、母親たちと離乳食を作るなどしながら、子どもの成長の見守りや離乳食つくりの指導、育児の相談などを行っていた。また、自治体保健師の事例検討会にも参加させていただいた。地域の保健師・栄養士等が集まり、一つの家庭内状況の事例を通して、それぞれの視点から意見交換を行っていくものであった。やはり、保健師と栄養士とではそれぞれ視点が異なっていた。さらに、実際にその家族の視点になるロールプレイ（家族造形法）では、その立場にならなければわからない気持ちを客観的ではなく主観的に考えることができた。この技法により今後どのような形に持っていくことが最良であるのかということも検討することができ、とても学びになった。

枝幸高校では地域周辺に大学がない高校であるため、高校生は大学生との関わりが少ない。学科ごとに分かれて行うセッションで、看護学科の学生はPCでのスライドショーにライブでセリフをつけた大学紹介の後、小グループに分かれ、大学生活や受験の体験談などについてのお話をした。大学生の立場からも高校生と関わる機会は少なく、高校生からの話も聞くことができてよかった。

札幌では北海道庁の見学もさせていただいた。道庁ではどのようなことが行われているのか全くわからな

い状態であったため、今回、道庁を見学させていただき、とても貴重な経験となった。講義では観光について教えていただいた。北海道に全国や世界から人を呼ぶためにはどのようにしてアピールしていくかなど、道庁職員だけでなく観光会社やその地域の方々とも連携を取りながら尽力しているということを学ぶことができた。また、名寄地域の一日観光のスケジュールを学生同士で考えるグループワークでは、どこをどういう順番で観光していくかなどについて話し、発表し合い、楽しかった。

これらの活動を通して「連携」は地域をはじめ様々なところでたくさんの職種の方々により行われていることなのだということを学ぶことができた。（看護学科・船木はるか）

(6) 知らない分野の連携や繋がりを学び、自分の分野とは違うと思うことでも実は繋がりがあることを知る

フィールドグループワークの授業を受けて、連携という事は病院の中でのイメージしかなかったが、地域の中でも連携というのは非常に大切であると学ぶことができた。初めは、連携ということがあまりよく分かっていなかったが、振り返ってみると自分たちが暮らしている地域やその周辺の地域でも、様々な職種の人たちが連携しているからこそ、今の暮らしがあるということを感じることができた。

フィールドであった枝幸町では、町の保健師や博物館の職員の方、通園センターの方、高校の先生方、役場の職員の方と関わる機会があったが、全ての方が、自分の暮らしている地域に関心を持ち、よりよい生活を送るために様々なことを行っているということを知ることができた。保健師は、住民のより良い暮らしのために現在ある問題や今後予測される問題に対しての支援を行ったり、小さな子を持つ母親のために栄養士などと協力して離乳食教室を行ったりしている場面を見学することができた。博物館の職員の方も、その地域の歴史などを調査したり、発掘されたものを展示したりすることで地域の発展につなげているように感じた。高校の先生も、これからの日本の担い手となる生徒さんたちの将来への選択という部分での関わりであるため、生徒さんたちのために様々な方法で情報提供しているということも学ぶことができた。

北海道庁への訪問の際には、地域よりも大きな単位での活動であり、日本だけにとどまらず、世界を視野に入れた活動をしているということを知ることができた。観光に力を入れることで、経済にも関係があり、地域の活性化にもつながっていくということも学ぶことができた。

大学の授業では、専門分野の連携については学ぶ機会が多いが、専門分野以外の連携について学んだり考えたりする機会は少ない。専門分野だけで考えていると、偏った考えしか持てなかったり、狭い視野になってしまったりしていたと思う。フィールドグループワークを行ったことで、今まで知ることのできない分野の連携や繋がりを学ぶことができたとともに、広い視野を持つことが出来るようになると感じた。専門だけではなく、幅広い分野のことも知っていることで、専門分野の中でも考え方の幅を広げることができ、さらにより良い社会を作っていくことができるのではないかと感じた。フィールドグループワークは、視野を広げることができ、自分が学んでいる分野とは違うと思うことでも実は繋がりがあるということも学ぶことができ、とても楽しい貴重な機会であった。（看護学科･村上奈津季）

(7) 他学科の先生や学生と一緒に様々な活動をすることで、楽しく連携を学ぶことができる

この1年間、フィールドグループワークという講義の中の活動として、様々な場所に行き、楽しく色々なことを学ぶことができた。

主なフィールドであった枝幸町では、役場や保育所、高校に行った。役場や保育所では、保健師・保育士の方に案内してもらいながら、さまざまな職種が連携して働いている現場を見学させて頂いた。道北地域の保健師の方々が集まる事例検討会にも参加させていただいた。事例を通して参加者の色々な意見や考えを共有したり、質問し合ったりして、地域の方の健康や幸せな生活の実現を目指しているということがわかった。高校への訪問では、高校生の方とお話をして、大学受験に向けて高校で頑張ったことや、大学に入ってからの生活や楽しさを伝えた。自分が高校生の時も、近くに大学はなく、大学生と交流する機会などはなかったため、受験へのイメージや、大学生活のイメージはなかなかつかなかった。それを、実際に大学生と話して

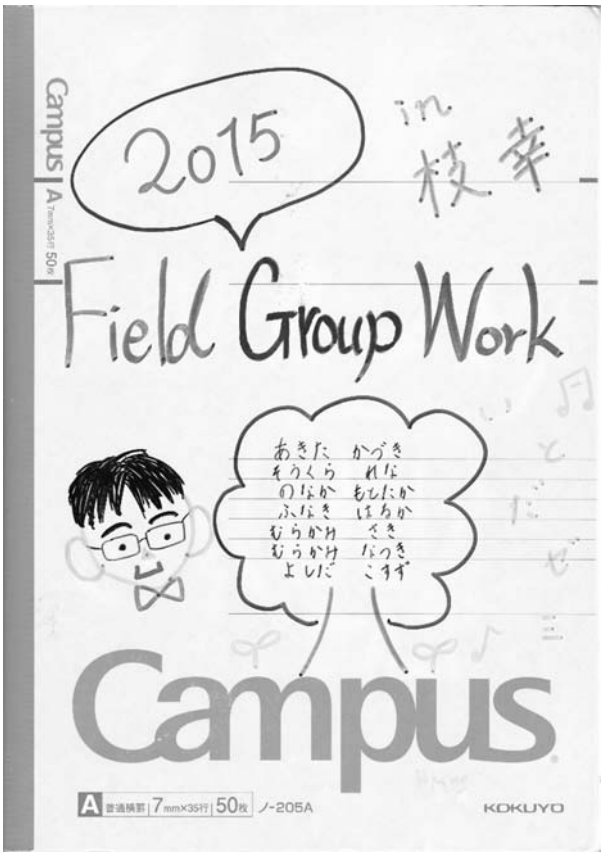
交流すると、イメージも具体的になり、将来への希望や、頑張ろうという気持ちが出てくるのではないかと感じた。大学生側としても、高校の頃を思い出し、初心に戻れたので、とても良い経験となった。

北海道庁の見学は、このグループに入っていなければ行けなかった、とても貴重な体験であった。見るもの全てが初めてで、「こんな職業やこんな部署もあるんだ」、「ここが北海道の中心であり、政治や経済、社会制度や道民の生活を支えているんだ」と感じた。1日目には、観光局の方にお話をしていただいた。北海道の観光について、様々な視点からお話ししていただいた。普段当たり前のように見ている景色や、食べている物などは、北海道の誇るべき観光資源であると学んだ。看護の勉強をしているだけではなかなか学べなかった観光について学ぶことができ、自分の生まれ育った地の素晴らしさに気付くことができた。

普段は看護学科の中で学習しているが、こうして他学科の先生や学生と一緒に様々な活動をすることで、自分が今まで気づかなかったことに気づけたり、色々な人の考え方に触れることで視野が広がり、楽しく連携を学べた。また、メンバーも仲が良く、活動ひとつひとつを楽しむことができた。色々なことに興味をもって、チーム一丸となって楽しく活動することが、良い連携につながるのではないかと、このフィールドグループワークを通して学ぶことができた。（看護学科・吉田冴鈴）

4．グループ活動の総括

「糸田グループ」の活動はフィールドノーツと名づけられたA4サイズの大学ノート［写真1］に輪番で記録した。12月末までに各人が執筆したレポートは提出された時点でスマートフォン・アプリケーションのLINEでグループ全員にシェアされた。グループワークでの写真もLINEのアルバムにアップした。そうすることで2016年1月18日にはフィールドノーツやレポートの記述と写真からのスライド及び発表原稿の作成が容易となった。年間を通した多様な活動のすべてにおいて楽しく学べたことから、発表のタイトルは「楽しいフィールド・グループ・ワークのつくりかた」となった。この日の協働作業の状況はフィールドノーツに「写真を見て、思い出しながら楽しく作りました」と記載されている。活動の成果は1月25日の全学的な「フィールドグループワーク報告会」においてパワーポイントによりプレゼンテーションされた。発表後のフィールドノーツには「笑いをとりました！（笑）」「この一年間の活動と学び、そして楽しさを伝えることができました」「本当に楽しいFGWでした。ありがとうございました!!」と記されている。

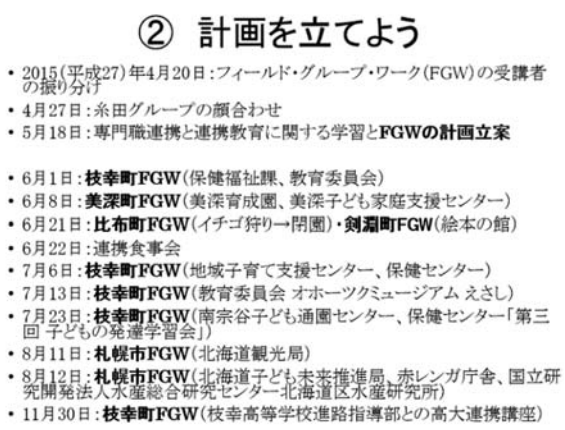


［写真１］ フィールドノーツ

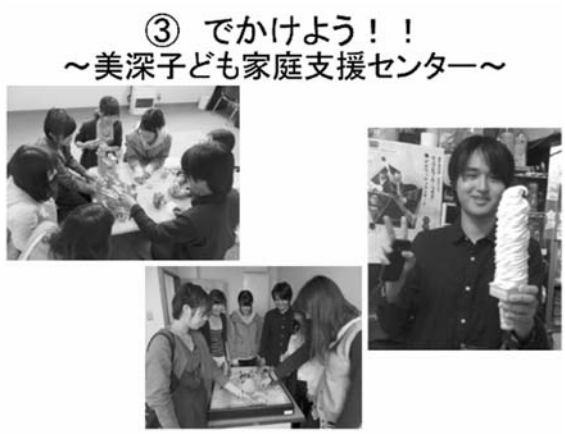
「糸田グループ」の学生たちによるスライドと発表の原稿を次に示す。

【スライド1】私たちはこの1年間、フィールドグループワークという講義の中の活動を通して、様々な場所に行き、楽しく色々なことを学ぶことができました。今日は、写真で活動してきたことを発表したいと思います。

【スライド2】 栄養学科2名、看護学科5名の学生が、児童学科の糸田先生のもとに集まりました。1年間を通して、このメンバーで活動しました。



【スライド3】 メンバーが集まったら次は計画を立てます。糸田先生の広い人脈をもとに、枝幸町、美深町、北海道庁などに足を運び、連携について学んできました。



【スライド4】 まずは美深育成園と美深子ども家庭支援センターへ行きました。ここでは実際に施設内を見学させていただき、職員さんのお話を聞いて、初めて児童養護施設とはどのような場所かということを知りました。予想以上に多くの子どもたちがそこでは暮らしていました。子どもたちはとても元気がよく、笑顔で挨拶してくれたのが嬉しかったです。また、児童家庭支援センターでは里親制度のお話を聞き、プレイセラピーに使われる玩具や箱庭療法なども実際に体験しました。帰りに、井上食堂に寄って、ソフトクリームをみんなで食べました。右の写真は、一番大きな6Lサイズです。

【スライド5】 左の写真は、枝幸の観光名所 「千畳岩」に行ってみんなで海を見た時の写真です。風が強くて寒かったです。右の写真は､6月に行った連携食事会の写真です。看護学科と栄養学科で集まって、「体に良いものを作る」というテーマで、鍋を作りました。予算を五千円に設定し、電卓ではなく勘を使い、相談しながら買い物をした結果、なんと、五千円ぴったりの合計金額となりました！　これぞ連携と思った瞬間でした。

【スライド6】 7月には、枝幸町の、地域子育て支援センターと保健センターに行きました。保健師が、小さな子をもつ母親のために、栄養士や保育士と協力して、離乳食教室を行っている場面を見学することができました。

【スライド7】 この写真は、オホーツクミュージアムえさしの館長さんに、枝幸の歴史についてお話ししていただいた時の写真です。埋蔵物の発掘を予定していましたが、天候が悪かったので、その場所だけ見学させていただきました。クイズ形式でわかりやすく枝幸の歴史について説明してくれました。珍回答が続出し、とても思い出深い学びとなりました。

【スライド8】 この写真は三笠山展望閣から枝幸を一望しているところです。天気も良く、とても綺麗な景色を見ることができました。南宗谷子ども通園センターでは、了承をいただき、マジック・ミラー越しに発達訓練の様子を見学させていただきました。子ども一人一人に合わせた特殊な訓練を間近で見るという貴重な経験となりました。また、支援を受けるまでの流れについても教えていただきました。

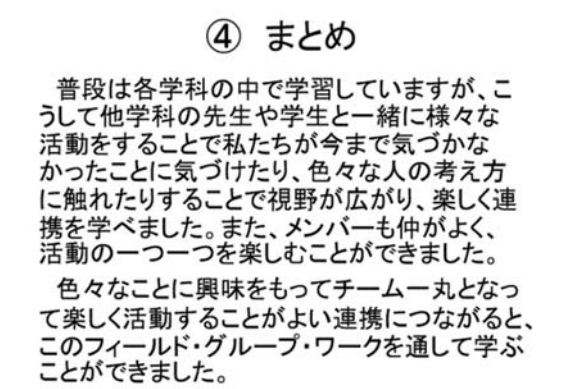
【スライド9】 道北地域の枝幸町・浜頓別町・中頓別町の専門職が集まる事例検討会に参加しました。地域の保健師・栄養士が集まり、一つの家庭内状況の事例を通して、それぞれの視点から意見交換を行っていくものでした。保健師と栄養士ではそれぞれ視点が異なっていて、今後どのような支援を行っていくか検討することができました。家族造形法を用いたロールプレイではその立場にならなければわからない気持ちを、客観的にではなく、主観的に考えることができました。

【スライド10】 8月には北海道庁に行き、観光局の方に北海道の観光について様々な視点からお話をしていただきました。普段当たり前のように見ている景色や食べているものなどは、北海道の誇るべき観光資源であると学びました。私たちが生まれ育った地や、今、暮らしている地のすばらしさに気づくことができました。左の写真は友達に名寄市を案内するプランをたてているところです。右の写真はその発表をしているところです。

【スライド11】 この写真は夜、北海道庁の観光局の方々と懇親会をした時の写真です。ちなみに前列右側の二人はオードリーの春日と若林（のそっくりさん）です。

【スライド12】 子ども未来推進局の方は、各市町村の方の声をくみ取り、その声を国に届けることで法律や制度改正につなげていました。このような場面では、国と道が、道と市町村が、連携をしていくことで法や制度に現場の声を反映しているということを学びました。また、出生率に着目し、これから子どもを産み育てていく方にとって、どのような制度が充実していけば仕事と育児を両立していけるかなどもここで検討されていました。右の写真はホテルのレストランのお弁当バイキングを楽しんでいる様子です。

【スライド13】 11月には「高大連携講座」として枝幸高校で高校生に向けて大学生活について話しました。栄養学科は管理栄養士についての説明と、フードモデルを使って献立を作るグループ・ワークを実施しました。看護学科は大学の説明をして、小グループに分かれて質問を受けたり、交流をはかりました。



【スライド14】 まとめとして、普段は各学科の中で学習していますが、こうして他学科の先生や学生と一緒に様々な活動をすることで私たちが今まで気づかなかったことに気づけたり、色々な人の考え方に触れたりすることで視野が広がり、楽しく連携を学べました。また、メンバーも仲がよく、活動の一つ一つを楽しむことができました。色々なことに興味をもってチーム一丸となって楽しく活動することがよい連携につながると、このフィールドグループワークを通して学ぶことができました。

【スライド15】 ご清聴ありがとうございました。

5．おわりに

実務家出身教員である責任著者（糸田）はかつて北海道職員として1992（平成4）年5月から1994（平成6）年3月まで北海道旭川児童相談所稚内分室に勤務して以来、2011（平成23）年に成立した北・北海道中央圏域定住自立圏を構成する名寄市・士別市・和寒町・剣淵町・下川町・美深町・音威子府村・中川町・幌加内町・西興部村・枝幸町・浜頓別町・中頓別町のなかでもとくに南宗谷地域（枝幸町・浜頓別町・中頓別町）の保健師の方々や子ども通園センターの方々と専門職連携において良好な関係を維持してきた。また、大学における学務分掌では入試広報委員長として、それまで関朋昭副委員長が築いてこられた北海道枝幸高等学校との円滑な連携関係も継続させていきたいと考えていた。そうしたコンテクストの中で、短期大学部児童学科も新年度からは保健福祉学部に四年制の社会保育学科として合流すべく現在はまだ「短大」の教員でありながらも将来を見据えて前倒しで「学部」の連携教育科目「フィールドグループワーク」（３年次選択科目）を担当するにあたり、北・北海道中央圏域定住自立圏のうちでもまずは本学より何人もの卒業生が看護学科からは保健師として、児童学科からは保育士として就職している「枝幸町」を主たるフィールドとさ

せていただくことにした。それはちょうど90分という1コマの授業やディスカッションを車中で可能にする距離でもあった。

必修科目ではない「フィールドグループワーク」という選択科目に興味を示す学生たちは、それだけポジティブでモチベーションも高く、相互作用で教員側の意欲向上も促される。グループのメンバーが確定した時点で、担当教員の前職は北海道職員で児童相談所などにも勤務したキャリアがあること、現在も同じ定住自立圏の美深町で美深子ども家庭支援センター（児童福祉法上は児童家庭支援センター）の心理職（非常勤）も兼ねていることを学生たちに伝えたところ、枝幸町役場や枝幸高校だけでなく美深育成園（児童養護施設）や札幌の北海道庁も訪問したいとの新たな希望も確認された。また、行政は「市町村－道－国」というレベルで何が同じで何が違うのかなどの疑問も出たことから、札幌では北海道庁だけでなく国の機関である国立研究開発法人水産総合研究センター北海道区水産研究所も訪ねてみることにもなった。学生による「先生だけが授業の内容を決めるのではなく、学生が自主的に学ぶ機会を作っていただいた」などの感想はこうしたプロセスを経て創発されてきたものである。

教育心理学でいわれる適性処遇交互作用（ATI）などの考え方によれば、能力の高い学び手には「自分で情報を収集して考えること」を教師は援助するのがよいとされる。しかし、学生自らが専門職連携を学べる多様な関係諸機関にアポイントメントをとり、現場の実務家に専門職連携を自ら学びに赴くことは容易ではない。そこでリソースとなる教員がeメールや公用車などのツールを操り、そこを「媒介する」のである。

2016（平成28）年度からは保健福祉学部の再編・強化により栄養学科・看護学科・社会福祉学科・社会保育学科という四学科構成で新カリキュラムへと移行する。それに伴いこの「フィールドグループワーク」も「地域との協働」という科目に変わる。この新カリキュラムについても、ケアの未来をひらく専門職養成が全て一学部だけで行われる名寄市立大学らしい特色ある連携教育として、弛まず更なる充実を図っていく必要があろう。

※ 本研究報告の一部は2015年10月 24日の第8回北東北・北海道フィールドワーク社会心理学研究会において発表した。

謝辞

IPW / IPEを行うにあたり、枝幸町保健福祉課保健予防グループ植村由佳副主幹・若松泰子副主幹はじめ保健師・栄養士のみなさま、浜頓別町・中頓別町の保健師・栄養士のみなさま、枝幸町教育委員会柳辰哉次長・浜中聡副主幹・高畠孝宗オホーツクミュージアムえさし館長はじめ教育委員会のみなさま、枝幸町立枝幸保育所･枝幸地域子育て支援センター升田裕見子所長はじめ保育士のみなさま､南宗谷子ども通園センター葛西誠所長はじめ保育士のみなさま、北海道枝幸高等学校林正憲校長・中村遼進路指導部長はじめ教諭のみなさま、美深育成園長野正稔園長・美深子ども家庭支援センター吉田千春相談員はじめ社会福祉法人美深育成園のみなさま、北海道経済部観光局新出哲也国際観光局長・逸見光寿主査（国際観光）はじめ観光局のみなさま、北海道保健福祉部子ども未来推進局森みどり主幹はじめ子ども未来推進局のみなさま、国立研究開発法人水産総合研究センター北海道区水産研究所永澤亨さけ・ます資源部長はじめ北海道区水産研究所のみなさま、本学看護学科播本雅津子連携教育委員長、教養教育部関朋昭入試広報副委員長、大学事務局教務課教務係永松久嗣主事、枝幸町のご出身で名寄市総務部企画課秘書係柳さとみ主事、名寄市職員のみなさまに大変お世話になりました。これもまさに連携でありノットワーキング（人々の結び目をつくる活動）です。記して感謝の意を表します。ありがとうございました。

文　献

エンゲストローム，ユーリア（山住勝広ほか訳）『ノットワークする活動理論: チームから結び目へ』 新曜社　2013年
埼玉県立大学（編集）『ＩＰＷ（Interprofessional Work）を学ぶ：利用者中心の保健医療福祉連携』 中央法規　2009年